

九州以北の照葉樹林フロラ

服 部 保^{1)*}・南 山 典 子¹⁾

Flora of the Lucidophyllous Forest in Kyushu and Northward in Japan

Tamotsu HATTORI^{1)*}, Noriko MINAMIYAMA¹⁾

Abstract

The warm temperate and subtropical zones in Japan were covered by a forest dominated by evergreen broad-leaf trees of *Castanopsis*, *Pasania*, *Quercus* (*Cyclobalanops*), *Cinnamomum*, *Persea*, etc. This forest is called the evergreen broad-leaf forest, or the lucidophyllous forest. Up to now, the lucidophyllous forest has been studied by many authors from a phytosociological, ecological or taxonomical point of view. However, there has been no list of all the component species of the lucidophyllous forest. In order to clear critical conditions of the component species, we made a list of all the component species of the lucidophyllous forest in Kyushu and northward in Japan according to red data books of plant species, an atlas of Japanese flora, phytosociological papers, illustrated books of Japanese flora, and a list of local flora.

Key words : endangered species, evergreen broad-leaf forest, flora, laurel forest, lucidophyllous forest

はじめに

国内の照葉樹林の種類組成については多くの研究者によって調査・研究が進められ、群落組成表や総合常在度表にまとめられているように、その樹林を構成する主要な植物の種名はすでに明らかにされている。しかしながら、照葉樹林に出現するにもかかわらず、個体数がきわめて少ない種、局地的に分布している種、腐生・寄生植物のように限られた季節に出現する種、着生植物のように確認が困難な種については、植生調査時における出現頻度が非常に低いために偶生種として取り扱われ、照葉樹林の構成種として意識されない場合が少なくない。このような出現頻度の低い種も含めて、照葉樹林を構成する植物のリストを作成することは、照葉樹林内に生育する絶滅危惧植物の保全や照葉樹林における生物多様性の保全を進める上で大変重要である。著者らは、現在までの調査資料と共に各種文献により、九州以北の照葉樹林を構成する植物の一覧表を作成した。情報不足のため不十分な点もあると思われるが、第一段階としてまず公表

し、今後修正を続けたい。

調査方法

1. 調査対象種

国内における照葉樹林は琉球列島より東北地方まで分布し、植物社会学的にはヤブツバキクラスにまとめられている。ヤブツバキクラスは屋久島・種子島以南に分布するスダジイーリュウキュウアオキオーダーと九州以北のスダジイーヤブコウジオーダーに二分される(服部・中西, 1983)。今回調査対象とした植物は、スダジイーヤブコウジオーダーに所属する照葉樹林に生育する種とした。それらの種のうち、タブノキやヤブツバキのように琉球列島から東北までの広域に分布する種から小地域に限定されるカンアオイのような遺存型の種まで様々であるが、対象種は屋久島・種子島を除く九州本土以北のいずれかの照葉樹林に少なくとも1カ所以上分布している種とした。

¹⁾ 兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 Division of Ecological Restoration, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

* 兼任: 姫路工業大学自然・環境科学研究所 〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目 Institute of Natural and Environmental Sciences, HIT; Yayoigaoka 6, Sanda, 669-1546 Japan

2. 調査資料

照葉樹林構成種の目録作成に関して使用した文献は、①照葉樹林に関する植物社会学的研究の成果、②植物図鑑、③地域植物誌、④レッドデータブック、⑤植物分布図、⑥その他である。文献は以下の通りである。照葉樹林に関する植物社会学的研究の論文として、鈴木 (1952)、鈴木・鈴木 (1973)、宮脇 (1980,1981,1982,1983,1984,1985,1986,1987)、宮脇ほか (1971)、伊藤 (1972,1974)、伊藤ほか (1992)、大場 (1971,1982)、山中 (1978)、服部・中西 (1983)、服部 (1985) を用いた。植物図鑑としては、佐竹ほか (1981,1982a,1982b,1989a,1989b)、倉田・中池 (1979,1981,1983,1985,1987,1990) を使用した。地域植物誌としては、熊本記念植物採集会 (1969)、岡ほか (1972)、千葉県生物学会 (1975)、初島 (1975)、山中 (1978)、鈴木ほか (1981)、杉本 (1984)、神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館 (1988)、阿部 (1990)、桑島 (1990)、南谷 (1992)、広島大学理学部付属宮島自然植物実験所・比婆科学教育振興会 (1997)、伊藤 (1998)、東京都における保護上重要な野生生物の種に関する検討会 (1998a) を用いた。レッドデータブックとして、広島県野生生物保護対策検討会 (1995)、貴重な野生生物等選定委員会 (1995)、愛知県植物誌調査会 (1996)、沖縄県環境保健部自然保護課 (1996)、岡山の自然を守る会・自然研究会 (1997)、島根県環境生活部景観自然課 (1997)、熊本県希少野生動物検討委員会 (1998)、埼玉県環境生活部自然保護課 (1998)、東京都における保護上重要な野生生物の種に関する検討会 (1998b)、千葉県環境部自然保護課 (1999)、茨城県版レッドデータブック植物編普及版作成検討委員会 (1999)、高知県文化環境部環境保全課 (1999)、環境庁 (2000)、宮崎県版レッドデータブック作成検討委員会 (2000)、大阪府農林水産部緑の環境整備室 (2000)、三重県立博物館・三重自然誌の会 (2001)、神奈川県レッドデータ生物調査団 (1995) を使用した。分布図は、Horikawa (1972,1976) を用いた。その他として、宮脇ほか (1978) の植生便覧を使用した。

3. 照葉樹林構成種の基準

照葉樹林は林冠が照葉樹 (クチクラ層のよく発達した光沢がある葉をもつ樹種) に被われ、林内にも多数の照葉樹が生育する樹林と定義されている (中野, 1930; 今西・吉良, 1953; 田川, 1983; 服部, 1985; 服部・浅見, 1998)。照葉樹林は樹林の自然性によって照葉原生林 (人の手の入っていない樹林)、照葉自然林 (多少の利用が認められるが、社寺林等として保護されてきた樹林)、照葉二次林 (薪炭林として利用されてきた萌芽林)、照葉人工林 (植栽によって形成された樹林) に区別される (服部・浅見, 1998)。調査対象とした照葉樹林は、

植生自然度9に該当する照葉原生林と自然性の高い照葉自然林であり、照葉二次林および照葉人工林は除外した。照葉樹林内にはヒサカキ、ヤブツバキ、サカキ、ネズミモチといった照葉樹だけでなく、林内の様々な立地条件に対応して、常緑多年生草本、夏緑多年生草本、夏緑樹、着生植物、腐生植物、ツル植物などの様々な生活形を持つ植物が生育しているが、一般的には林冠のギャップが大きく、林内の照度が高いほど夏緑樹や草本類が多くなる傾向がある。照葉樹林も林冠のギャップ形成に始まる群落動態によって維持・再生されているので (仲, 1984; 磯谷・奥富, 1991; Yamamoto, 1992)、ギャップに生育するタラノキ、ヌルデ、アカメガシワ、カラスザンショウ、イイギリなどの夏緑樹も広い意味では照葉樹林構成種と見なすべきであろうが、今回の照葉樹林構成種の基準としては、ギャップ相に集中するような種を省き、服部ほか (2000) をもとに以下の6つの基準を設定し、構成種を抽出した。なお、構成種は種、亜種、変種レベルでとりあげた。

- ① 照葉樹林にごく普通に生育し、多くの研究者が作成した照葉樹林の総合常在度に高い頻度で出現するヤブツバキ、ヒサカキ、アオキ、スタジイ、コジイ、アラカシ、アカガシ、ウラジロガシ、カナメモチ、リンボク、バクチノキ、ヤマモガシ、ヤマモモ、ナギ、イヌマキ、サカキ、シキミなどの照葉樹 (ヤブツバキクラスに含まれる群集、群団、オーダーなどの植生単位の標徴種や識別種に位置付けられている種)。
- ② 照葉樹林における出現頻度は高くはないが、他の群落にはまったく出現しないか、または、ほとんど出現しないマヤラン、キリシマシャクジョウ、ツチトリモチなどの植物 (照葉樹林にも出現するが、疎林、林縁、伐採跡地、草原などに分布の中心がある夏緑樹、草本類は省く)。
- ③ 絶滅危惧種に指定されているごく稀な種であり、生育環境がよく調べられていないが、照葉樹林に生育している記録があるか、またはそのように推定されるアキザキナギラン、ナガバヒゼンマユミ、コウライタチバナなどの植物。
- ④ 現在、照葉樹林の他に竹林、植林、夏緑二次林にもよく出現するが、本来照葉樹林に生育していたと考えられるエビネ、シュンラン、ミヤマウズラ、カンアオイ類などの植物。
- ⑤ 垂直分布から見ると照葉樹林帯上部から夏緑林帯下部にかけて分布するミヤマシキミ、ユズリハなどの照葉樹やシノブ、イワオモダカ、アオネカズラなどの着生植物 (同じようなゾーンに出現する夏緑樹や裏日本側の夏緑林に集中し、照葉樹林には少ない

エゾユズリハ、ヒメモチ、ユキツバキなどの照葉樹は省く。

- ⑥ フウラン、マメツタ、セッコク、マメツタラン、ムギラン、ムカデランのように岩上にも着生するが、照葉樹にもよく着生する植物。

4. 照葉樹林構成種の一覧表作成

2に示した文献をもとに、3の基準に従って九州以北に分布する照葉樹林構成種を抽出した。各照葉樹林構成種について、生活形、固有種（日本国内だけに分布する種）、主要分布域、各都府県における分布や絶滅の可能性を文献をもとに調査し、記録した。

生活形については、照葉高木（林冠を構成する高木）、照葉小高木（亜高木層に達する高木）、照葉低木（低木層以下の樹木）、常緑ツル植物、夏緑ツル植物、着生ラン、着生シダ、着生低木、木生シダ、ツル生シダ、地生シダ、地生ラン、多年生草本、腐生ラン、腐生植物（ラン科以外の腐生植物）、寄生植物に区分した。

地理的分布については、北限や東限を重視して主要分布域をまとめた。国内全体、都府県における分布は地方植物誌や植物分布図を参考に記録した。

レッドデータブックの出版されている都府県では、EX（絶滅）、DD（情報不足）、A（絶滅にもっとも近い）、B（Aに次ぐ）、C（Bに次ぐ）、D（Cに次ぐ）に区分して示した。国、都、府、県によって絶滅段階の評価基準が異なっているため、便宜上A、B、C、Dで簡略化させている。なお、都府県の選出は、照葉樹林構成種の重要分布域であって、レッドデータブックや地方植物誌が刊行されている地域を基準とし、宮崎県、熊本県、高知県、広島県、島根県、岡山県、兵庫県、大阪府、三重県、愛知県、東京都（伊豆諸島）、神奈川県、千葉県、茨城県、埼玉県とした。レッドデータブックは未刊行であるが、照葉樹林の分布拠点として重要な徳島県、山口県、静岡県については分布のみを示した。なお、調査対象種は前述したように屋久島・種子島を除く九州本土以北に分布している種としたが、それらの種のうち多くは、屋久島・種子島以南沖縄県にも分布している。そのために参考として沖縄県の欄も作成した。したがって、そこには沖縄県における照葉樹林構成種の全体は示されていない。また、日本の欄は環境庁（2000）のレッドデータの結果を示すために付け加えた。

調査結果

1. 照葉樹林構成種数

調査方法に基づいて、照葉樹林構成種目録を作成し、Appendix 1に示した。種の配列は、各々の種を検索するのにもっとも簡単なように種の和名の五十音順とし

た。その結果九州以北の照葉樹林構成種は479種（亜種、変種レベルも含む）に達した。このうち日本に固有な種は149種で、約30%前後の固有率となる。国内の維管束植物は亜種、変種まで含めて約8000種といわれている（環境庁、2000）。九州以北の照葉樹林構成種で全体の約6%前後占めていることになり、稀少種も含めると、照葉樹林構成種の種数は、この数値を見る限り低くはない。

都道府県別に見ると、宮崎県の種数が多く、今回の調査対象地の中ではもっとも北に位置する埼玉県が最小である。日本列島を北上するほど構成種数は減少する傾向が認められる。最多の宮崎県（380種）と最少の埼玉県（128種）を比較すると、3倍程度の差が認められる。

2. 絶滅危惧植物の割合

九州以北の照葉樹林構成種479種のうち、環境庁（2000）による絶滅が危惧される植物（全ランク種の計）は135種あり、全体の約30%に及んでいる。各都道府県別の規準による絶滅危惧率をみると、その割合のもっとも高い県は千葉県の約47%で、埼玉県の40%、兵庫県の38%がそれに続いている。各都府県別にみても絶滅危惧植物の割合は高い。

謝 辞

本資料をまとめるにあたり、姫路工業大学 自然・環境科学研究所 小館誓治氏、石田弘明氏、株式会社里と水辺研究所 田村和也氏、神戸大学発達科学部学生 西原美絵子氏に御協力いただきました。皆様に深く感謝いたします。本研究には日本学術振興会平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2）；課題番号13680649）の一部を使用しました。

文 献

- 阿部近一（1990）徳島県植物誌。教育出版センター、徳島、580p。
 愛知県植物誌調査会（1996編）植物からのSOS—愛知県の絶滅危惧植物。愛知県植物誌調査会、名古屋、130p。
 千葉県環境部自然保護課（1999編）千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物編。千葉県環境部自然保護課、千葉、435p。
 千葉県生物学会（1975編）新版千葉県植物誌。井上書店、東京、567p。
 初島彦彦（1975）琉球植物誌（追加・訂正）。沖縄生物教育研究会、那覇、1002p。
 服部 保・中西 哲（1983）日本の照葉樹林の群落体系について。神戸大教育学部研究集録、71、123-157。
 服部 保（1985）日本本土のシイタブ型照葉樹林の群落生態学的研究。神戸群落生態研究会研究報告、1、1-98。
 服部 保・浅見佳世（1998）照葉樹林の自然保護。沼田 真（編）、自然保護ハンドブック、朝倉書店、東京、371-382。

- 服部 保・小館誓治・石田弘明・田村和也 (2000) 鹿児島県野岳の照葉樹林における標高傾度に対する構成種、種多様性の分布。人と自然, no. 11, 13-41.
- 広島大学理学部付属宮島自然植物実験所・比婆科学教育振興会 (1997編) 広島県植物誌。中国新聞社, 広島, 832p.
- 広島県野生生物保護対策検討会 (1995編) 広島県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックひろしま—。広島県環境保健協会, 広島, 437p.
- Horikawa, Y. (1972) *Atlas of the Japanese Flora I*. Gakken Co., Tokyo, 500p.
- Horikawa, Y. (1976) *Atlas of the Japanese Flora II*. Gakken Co., Tokyo, 862p.
- 茨城県版レッドデータブック植物編普及版作成検討委員会 (1999編) 茨城における絶滅のおそれのある野生生物植物編普及版。茨城県生活環境部環境政策課, 97p.
- 今西錦司・吉良竜夫 (1953) 生物地理, 自然地理。朝倉書店, 東京, 235-313.
- 磯谷達宏・奥富 清 (1991) 箱根山函南原生林におけるアカガシ林の動態。日本生態学会誌, 41, 209-223.
- 伊藤 洋 (1998編) 埼玉県植物誌。埼玉県教育委員会・埼玉県立自然史博物館, 浦和, 833p.
- 伊藤秀三 (1972) 九州西部森林植生の植物社会学的研究 I, スタジイ自然林について。長崎大教養部紀要 (自然), 13, 43-50.
- 伊藤秀三 (1974) 九州西部森林植生の植物社会学的研究 II, アカガシおよびモミ自然林について。長崎大教養部紀要 (自然), 15, 59-74.
- 伊藤秀三・神野展光・川里弘孝・中西こずえ (1992) 対馬・龍良山の照葉樹林の研究 I. 傾度分析, 種変化率, 種多様性。長崎大教養部紀要, 33, 7-48.
- 神奈川県レッドデータ生物調査団 (1995編) 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学) 第7号—神奈川県レッドデータ生物調査報告書一。神奈川県植物誌調査会, 小田原, 257p.
- 神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館 (1988編) 神奈川県植物誌1988。神奈川県植物誌調査会・神奈川県立博物館, 1442p.
- 環境庁 (2000編) 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— 8, 植物 I (維管束植物)。自然環境研究センター, 東京, 660p.
- 貴重な野生生物等選定委員会 (1995編) 兵庫の貴重な自然—兵庫県版レッドデータブック—。兵庫県保健環境部環境局環境管理課, 神戸, 286p.
- 高知県文化環境部環境保全課 (1999編) 高知県植物版レッドリストについて。高知県文化環境部環境保全課, 高知, 58p.
- 熊本県希少野生動物植物検討委員会 (1998編) 熊本県の保護上重要な野生動物植物—レッドデータブックくまもと—。熊本県環境生活部自然保護課, 熊本, 381p.
- 熊本記念植物採集会 (1969) 熊本県植物誌。長崎書店, 熊本, 436p.
- 倉田 悟・中池敏之 (1979編) 日本のシダ植物図鑑分布・生態・分類—1。東京大学出版会, 東京, 628p.
- 倉田 悟・中池敏之 (1981編) 日本のシダ植物図鑑分布・生態・分類—2。東京大学出版会, 東京, 648p.
- 倉田 悟・中池敏之 (1983編) 日本のシダ植物図鑑分布・生態・分類—3。東京大学出版会, 東京, 728p.
- 倉田 悟・中池敏之 (1985編) 日本のシダ植物図鑑分布・生態・分類—4。東京大学出版会, 東京, 850p.
- 倉田 悟・中池敏之 (1987編) 日本のシダ植物図鑑分布・生態・分類—5。東京大学出版会, 東京, 816p.
- 倉田 悟・中池敏之 (1990編) 日本のシダ植物図鑑分布・生態・分類—6。東京大学出版会, 東京, 880p.
- 桑島正二 (1990) 大阪府植物目録。近畿植物同好会, 大阪, 197p.
- 三重県立博物館・三重自然誌の会 (2001編) レッドデータブック準備書—レッドデータブック三重2005—調査対象種および重要生態系候補地一次リスト。三重県立博物館・三重自然誌の会, 71p.
- 南谷忠志 (1992) 宮崎の植物分類地理。宮崎県の生物, 鉾脈社, 宮崎, 35-84.
- 宮脇 昭・藤原一絵・原田洋・楠 直・奥田重俊 (1971) 逗子市の植生。逗子市教育委員会, 逗子, 151p.
- 宮脇 昭・奥田重俊・望月陸夫 (1978編) 改訂版日本植生便覧。至文堂, 東京, 872p.
- 宮脇 昭 (1980編) 日本植生誌1. 屋久島。至文堂, 東京, 376p.
- 宮脇 昭 (1981編) 日本植生誌2. 九州。至文堂, 東京, 484p.
- 宮脇 昭 (1982編) 日本植生誌3. 四国。至文堂, 東京, 539p.
- 宮脇 昭 (1983編) 日本植生誌4. 中国。至文堂, 東京, 540p.
- 宮脇 昭 (1984編) 日本植生誌5. 近畿。至文堂, 東京, 569p.
- 宮脇 昭 (1985編) 日本植生誌6. 中部。至文堂, 東京, 604p.
- 宮脇 昭 (1986編) 日本植生誌7. 関東。至文堂, 東京, 641p.
- 宮脇 昭 (1987編) 日本植生誌8. 東北。至文堂, 東京, 605p.
- 宮崎県版レッドデータブック作成検討委員会 (2000編) 宮崎県の保護上重要な野生生物。宮崎県環境科学協会, 384p.
- 仲 和夫 (1984) 照葉樹林の更新。遺伝, 38 (4), 51-55.
- 中野治房 (1930) 植物群落と其遷移。岩波書店, 東京, 120p.
- 岡 国夫・他 (1972編) 山口県植物誌。山口県植物誌刊行会, 山口, 607p.
- 岡山の自然を守る会・自然研究会 (1997編) 岡山県の貴重な種子植物。岡山の自然を守る会, 64p.
- 沖縄県環境保健部自然保護課 (1996編) 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—。沖縄県環境保健部自然保護課, 479p.
- 大場達之 (1971) 御蔵島の植生。神奈川県立博物館研報, 1 (4), 26-52.
- 大場達之 (1982) 日本の植生。土木工学大系3, 自然環境論 (II), 彰国社, 東京, 69-191.
- 大阪府環境農林水産部緑の環境整備室 (2000編) 大阪府における保護上重要な野生生物—大阪府レッドデータブック—。大阪府環境農林水産部緑の環境整備室編, 442p.
- 埼玉県環境生活部自然保護課 (1998編) さいたまレッドデータブック—埼玉県希少野生生物調査報告書 植物編—。埼玉県環境生活部自然保護課, 411p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (1981編) 日本の野生植物 草本Ⅲ合弁花類。平凡社, 東京, 259p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (1982a編) 日本の野生植物 草本Ⅰ単子葉類。平凡社, 東京, 305p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (1982b編) 日本の野生植物 草本Ⅱ離弁花類。平凡社, 東京, 318p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (1989a編) 日本の野生植物 木本Ⅰ。平凡社, 東京, 321p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫 (1989b編) 日本の野生植物 木本Ⅱ。平凡社, 東京, 305p.
- 島根県環境生活部景観自然課 (1997編) しまねレッドデータブック

- ク—島根県の保護上重要な野生動植物— (植物編). 島根県環境生活部景観自然課, 松江, 266p.
- 杉本順一 (1984) 静岡県植物誌. 第一法規出版株式会社, 東京, 814p.
- 鈴木昌友・清水修・安見珠子・安昌美・藤田弘道・中崎保洋・和田尚幸・野口達也 (1981) 茨城県植物誌. 茨城県植物誌刊行会, 水戸, 339p.
- 鈴木時夫 (1952) 東亜の森林植生. 古今書院, 東京, 137p.
- 鈴木時夫・鈴木和子 (1973) 暖帯 (暖温帯) の植物社会. 植物社会学, 共立出版, 東京, 18-24.
- 田川日出夫 (1983) われらが故郷照葉樹林. 高校通信東書生物, 230, 6-8.
- 東京都における保護上重要な野生生物の種に関する検討会 (1998a) 東京都の野生生物種目録. 東京都環境保全局自然保護部, 東京, 127p.
- 東京都における保護上重要な野生生物の種に関する検討会 (1998b) 東京都の野生生物種目録. 東京都環境保全局自然保護部, 東京, 77p.
- Yamamoto, S. (1992) Gap characteristics and gap regeneration in primary evergreen broad-leaved forest of western Japan. *Bot. Mag. Tokyo*, **105**, 29-45.
- 山中二男 (1978) 高知県の植生と植物相. 林野弘済会高知支部, 高知, 461p.

(2001年5月31日受付)

(2001年10月5日受理)

Appendix 1 (continued)

和名	学名	生活形態	固有	主要分布域	沖縄	宮崎	熊本	高知	徳島	山口	広島	島根	岡山	兵庫	大阪	三重	愛知	静岡	伊豆	神奈	千葉	茨城	埼玉	日本	
ヤブツテツ	<i>Cyrtomium fortunei</i>	地生シダ		本(岩手-秋田以西)・四・九		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	C	+	+	+	+	+	
ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>	小高木		本・四・九・琉	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
ヤブニッケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i>	高木		本(福島-能登以西)・四・九・琉	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
ヤブミョウガ	<i>Pollia japonica</i>	草本		本(宮城以西)・四・九		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
ヤブラン	<i>Liriope platyphylla</i>	草本		本・四・九・琉	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
ヤマアイ	<i>Mercurialis leiocarpa</i>	草本		本・四・九・琉	B	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+					B	+
ヤマイタチシダ	<i>Dryopteris varia</i> var. <i>setosa</i>	地生シダ		北(南部)・本・四・九・屋久		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
ヤマコンニャク	<i>Amorphophalus hirtus</i> var. <i>kiusianus</i>	草本	固	四(高知)・九(長崎・鹿児島)・琉	A			EX																	C
ヤマヒハツ	<i>Antidesma japonicum</i>	低木		本(和歌山)・四・九・琉	+	D	+	+																	+
ヤマビウ	<i>Meliosma rigida</i>	小高木		本(遠江-山口以西, 太平洋側)・四・九・琉	+	+	+	+	+	+				C	+	+	C	+							+
ヤマモガシ	<i>Helicia cochinchinensis</i>	小高木		本(駿河-山口以西, 太平洋側)・四・九・琉	+	+	+	+	+	C							C	+							+
ヤマモモ	<i>Myrica rubra</i>	高木		本(房総-若狭以西)・四・九・琉	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+				+
ヤウラハチシヨウシダ	<i>Pteris natiensis</i>	地生シダ	固	本(和歌山)・四・九(鹿児島・宮崎・長崎)		+		B	+							B									+
ユウコクラン	<i>Liparis formosana</i>	地生ラン		九(南部)・琉	+	C																			+
ユキモチソウ	<i>Arisaema sikokianum</i>	草本	固	本(近畿)・四・九(熊本)			+	C	+				DD	A		A									C
ユズリハ	<i>Daphniphyllum macropodum</i>	小高木		本(宮城-秋田以西)・四・九・琉	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ヨウラクヒバ	<i>Lycopodium phlegmaria</i>	着生シダ		九(大隅・屋久・種子)・琉		B																			A
ヨウラクラン	<i>Oberonia japonica</i>	着生ラン	固	本(宮城-若狭以西)・四・九・琉	DD	+	+	+	+		C			A	A	A		+	C	B	+	+	B	+	+
ヨコレイタチシダ	<i>Dryopteris sordidipes</i>	地生シダ		四(高知)・九(宮崎・鹿児島)・琉	+	C		B																	+
ランヨウアオイ	<i>Heterotropa blumei</i>	カンアオイ	固	本(関東南西部・静岡・山梨)															+		+				+
リュウキョウコケシノブ	<i>Mecodium riukiense</i>	地生シダ		本(和歌山)・四国(南東部)・九(南部)・琉	C	B		EX								B									+
リュウビンタイ	<i>Angiopteris lygodifolia</i>	地生シダ		本(伊豆以西, 太平洋側)・四(南部)・九(南部)・琉	+	+	+	A	+							A		+	B						+
リンボク	<i>Prunus spinulosa</i>	小高木		本(茨城-若狭以西, 日本海側稀)・四・九・琉	B	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+		B	C	C			+
ルリミナ	<i>Lasianthus japonicus</i>	低木		本(伊豆-島根以西)・四・九・琉	+	+	+	+	+	+	B	+		A	+	+	C	+							+
照葉樹林構成種 合計					247	380	344	357	312	259	250	192	202	250	227	291	232	291	211	208	208	150	128	479	
絶滅が危惧される照葉樹林構成種 合計					75	115	18	121			33	29	46	96	46	110	54		72	53	98	37	51	135	
絶滅危惧種の割合(%)					30.4	30.3	5.23	33.9			13.2	15.1	22.8	38.4	20.3	37.8	23.3		34.1	25.5	47.1	24.7	39.8	28.2	
固有種の種数			149																						
固有種の割合(%)			31.1																						

「日本」の列には、九州本土以北に分布する照葉樹林構成種のすべてが示されている。「沖縄」の列には、左記の種のうち琉球列島に分布する種のみが示されている。